

発表題目：「民族=分析概念」という捉え方と調査方法に関する考察

所属： 筑波大学 人文社会科学研究所

氏名： 浅田 直規

1200 字程度で発表内容を記載してください。

ICT が発達し、デジタル・オンライン時代に突入した今日、本セミナーが趣旨説明をする通り、民族に対する研究方法について再考することは必須であろう。本発表は、そうした問いの設定に対して、「そもそも民族とは何か？」を問い直すことを通じて、21 世紀的な民族研究の方法論について考えていきたい。

人類学において、民族とはそもそも関係的な概念として研究が積み重ねられてきた。民族とは、言わば、人びとがアイデンティティを構築する過程での、「我々」と「彼ら」を区別するものとして機能しており、単一の共同体が個別に存在するところで機能するものではないとされる。そして、その区別の際には、言語、歴史、地理的属性、生活様式、宗教など、様々なバロメーターが比較材料として使用され、必ずしも、すべてのケースで同様の比較がなされるとは限らない。

例えば、筆者が研究対象とするルーマニアにおいても、筆者との関係性の中では、ルーマニアという民族性が出現する一方で、地域間ではモルドバやトランシルバニアといったもっと小地域の民族性が表象される。

そういった意味において、民族とは研究者を含め、人びとが自らを相対化する際に使用する分析概念でしかないのかもしれない。実態としての民族というものは存在せず、自らが持つ情報・属性を、その時々に合わせて分析し、形を整えて外部に掲示するものとしての、「民族=分析概念」という考え方である。

であるとするならば、人類学的視点から考えるオンライン時代の民族研究とは、オンラインという「場」において、彼らがどのように自らを「分析」し、表象するのかを解き明かしていくことに他ならない。

本発表では、その一例として、筆者の研究対象であるルーマニアの孤児の中でも、国際養子縁組で海外に居住している元孤児たちを事例に考えていきたい。

ルーマニアから海外の家庭に引き取られていった孤児たちが「ルーマニア人」という民族に自らを当てはめることはない。ルーマニア的な名前を持ち、ルーマニア語を話し、ルーマニアの習俗に親しんでいたとしても、彼らはルーマニア人と相対した時、ルーマニア人を「他者」として設定する。

しかし、同時に、ルーマニアにおける養子縁組促進のオンラインキャンペーンに自らが登場するとき、彼らはコメントを返したり、投稿に「いいね」をしたりすることで、「ルーマニア人の」元孤児という属性を引き受け、「ルーマニア人であること」と、「ルーマニア人でないこと」が日常的に同時に発生する環境に身を置いている。それは、常に自らを分析する機会を与えられているということであり、SNS 上での投稿、コメント、「いいね」は、彼らが自らに対する分析のあり様を知るうえで重要な手掛かりになり得ると考えられる。